

平成22年度文部科学省委託事業

「学校評価充実・改善のための実践研究」

報告書



千葉市立幕張本郷中学校

わかる授業を目指して

～P D C Aサイクルに基づいた授業改善～

千葉市立幕張本郷中学校

1. 学校の概要

昭和 63 年 4 月に開校し、本年度で創立 23 年目を迎える。昭和 40 年に市街地を造成する目的で学区の整備が始まり、それ以降、年々人口は増加し続けている。現在の生徒数は 590 名で、特別支援学級 1 学級を含め、17 学級の中規模な学校である。生徒は素直で学習態度は真面目である。保護者や学区の人々は学校の教育に理解があり、生徒の健全育成の為に、保護者・地域と学校が協働して日々教育活動に取り組んでいる。



2. 実践研究

(1)重点目標の設定理由とミドルリーダーの関わり

①重点目標の設定理由

ア. 学校の教育活動の中心は授業である。授業が変われば、本校教育目標「自ら学び、心豊かに生きる生徒の育成」の具現化や、ひいては千葉市の教育目標「自ら考え、自ら学び、自ら行動できる力をはぐくむ」生徒の育成につながるであろう。

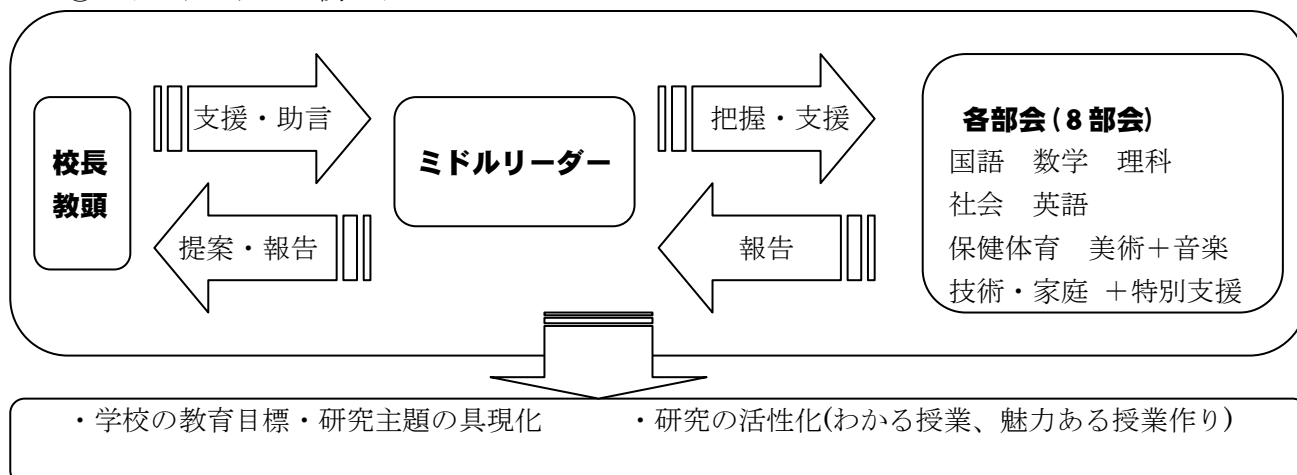
イ. 本校の保護者や生徒を対象に、例年、学校評価(25 項目のアンケート)を実施している。その中で「授業について」の項目は、理解度や満足度等について、全 10 項目に 4 段階評価で回答する形式であり、数字が大きいほど評価が高いと言える。アンケートの平均が 4～3 を A、2.9～2.5 を B、2.4 以下を C とするならば、本年度の授業についての評価は、

(平成 22 年度)	生徒の評価	— 10 項目中 A(2)、B(7)、C(1)
授業に関する	保護者の評価	— 10 項目中 A(0)、B(9)、C(1)
10 項目の評価	教員の評価	— 10 項目中 A(6)、B(3)、C(1)

という結果であった。教員の自己評価は高いものの、保護者と生徒では受け止め方、伝わり方に違いがあることがわかった。「生徒や保護者はどのような授業改善を求めているのか」を明らかにし、その要求と期待に応じていくことは、教育公務員の責務なのではないか。

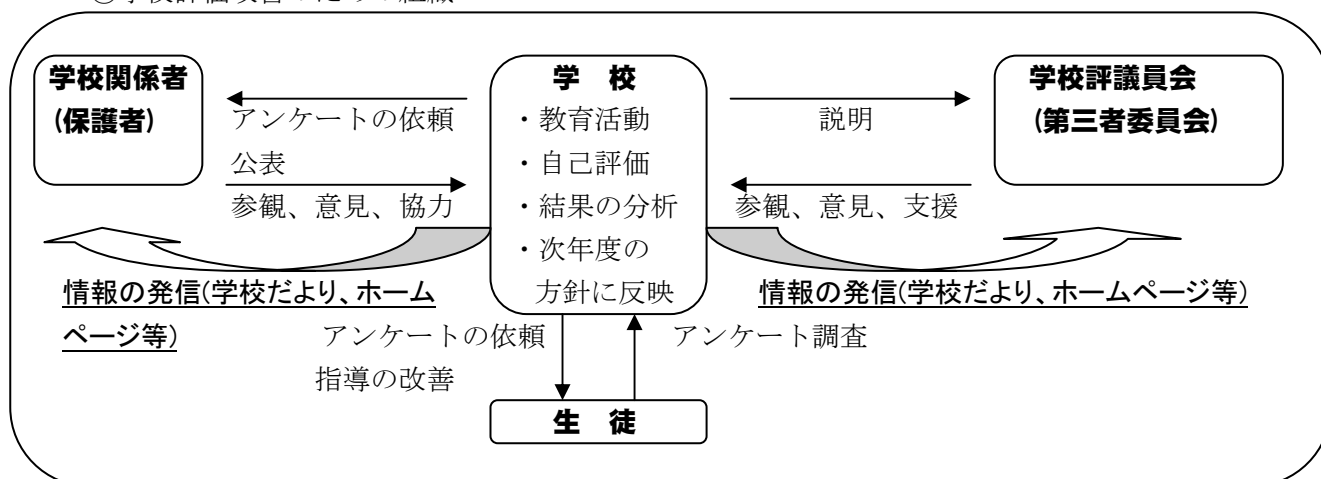
ウ. 学校教育は社会の反映である。世の中の状況が刻々と変化し、それに応じて理想とされる授業が変わっているのだから、授業改善を進める必要があるのではないか。

②ミドルリーダーの関わり



- ・課題の共有 ・教員ひとり一人の参画意識の向上 ・地域に開かれた、信頼される学校作り
- (2) チーム議論 I におけるミドルリーダーの関わりについて

①学校評価改善のための組織

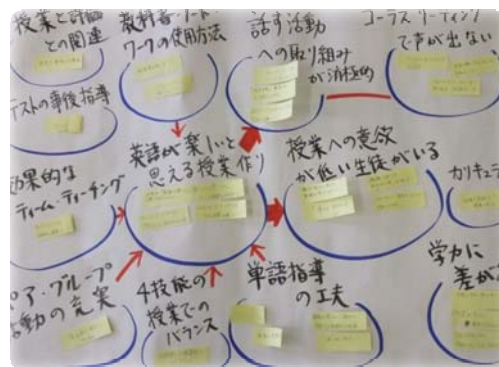


②現状把握(30分)

授業改善を行うには、まず直面している問題を明らかにし、生徒の実態を把握しなければならない。教員を国語4名、社会3名、理科4名、数学3名、英語4名、保健体育5名、音楽美術2名、技術・家庭・特別支援3名の計8チームに分け、KJ法を活用してグループごとに討議を行った。まず、学習指導上の課題を1人5枚～15枚程度の付箋に記入した。その後、模造紙の上で内容を紹介し、教師も生徒も日々忙しいといった実態、学習習慣や学習意欲に関する現状など、各チーム内で活発に意見が交わされた。

③課題の設定と目標・方法の設定(90分)

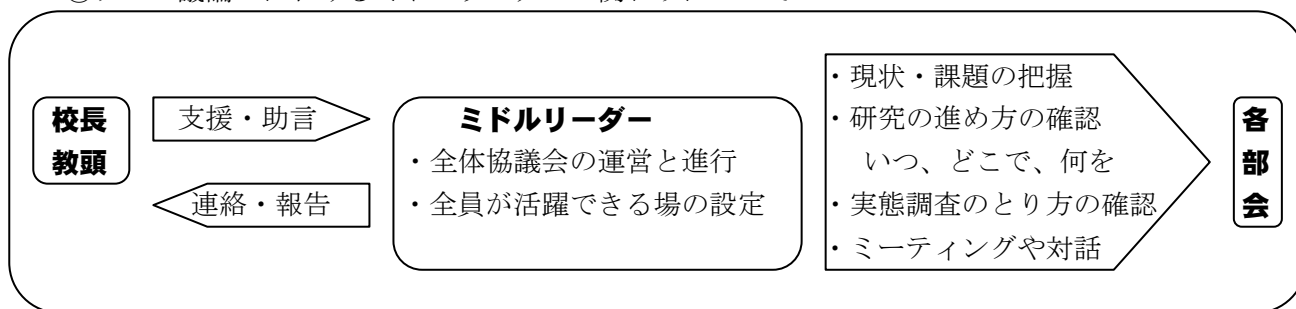
現状をふまえて実現可能な到達目標を確定し、方策を立てた。まず、現状把握で書かれた付箋をグループごとに分け、それぞれに見出しをつけた。中には、グループ分けをしたものの、現実には問題が重なっていて、どこに焦点化したらよいのかわからないものもあったので、内容を吟味し、いちばん扱いやすく具体的な成果が見えやすい一点に絞り込み、方法を設定した。生徒の実態が明らかになると同時に、教師が自らの姿勢を問い直す良い機会となった。



④実行 指導期間、指導回数、指導時間を決め、各チームごとに実行。

	目標	実行方法
国語	古典の音読に自信をつける。	基本の徹底。練習方法の工夫。生徒をほめる。
社会	聞く態度を養う。	地図の掲示。教師の話をしっかり聞くなど。
理科	安全に配慮して、実験を確実に行う。	実験の進め方マニュアルをつくる。
数学	計算力を高める。	計算小テスト、確認問題の実施。ヘルパーの活用など。
英語	2分間英語で会話を継続する。	インプットとアウトプット（トーク&トーク）の充実。
保健体育	生徒一人一人を教師がしっかり理解する。	学年会議や朝の打合せで教員間の情報交換を行う。
音楽・美術	伸び伸びと自分の意見や思いを表現する。	話し合いの手順を示す、相手のよいところを見つけるなど。
技術・家庭特別支援	授業で学んだことを家庭で実践する。	家庭での実践をレポートにする。買い物の実践など。

⑤チーム議論Ⅰにおけるミドルリーダーの関わりについて



(3) チーム議論Ⅱの実際とミドルリーダーの関わり

①実行状況のチェック(30分)

9月からの実践を振り返り、うまくいったこと、いかなかったこと、気づいたことを付箋に書き込んだ。その後、模造紙上に付箋を貼り、チーム内で実行状況を話し合った。「生徒同士で教え合う機会が増えた」、「手を挙げて発表する生徒が増えた」などの成果が出された一方で、「掲示物を活用するのはよかったが、掲示物を説明する時に、生徒の方に顔を向けるべきだった」などの反省点も出された。「指導効果を検証するため、データをとって検証している」、「生徒の学力状況に応じて指導するにはどうしたらよいか」など、さまざまな観点から意見交換が行われた。

②実行方法の改善と目標の再確認(40分)

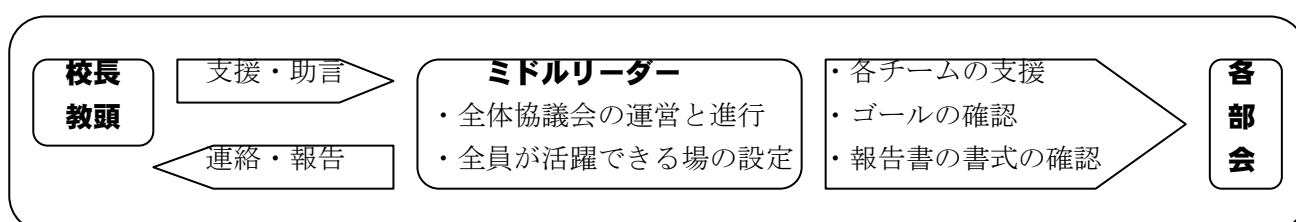
指導上の課題を共有しながら、付箋に書かれた内容をもとに、実行方法の改善を考えた。議論が進まない場面も一部見受けられたが、PDCAサイクルに基づいて討議をすることにより、各チームとも円滑に意見交換がなされた。チーム内の共通理解が深まり、教科として目指す方向性が確認できた。



③実行(2回目)

	実行方法の改善
国語	個別指導を行う。チーム分けの配慮。
社会	地図の指し方を工夫する。
理科	実験キットが出来次第、理科室の使い方マニュアルを活用する。
数学	計算の途中式を書くよう指導する。
英語	英語のトークの取り組みを段階的に行う。
保健体育	保健室の状況を把握し、情報を共有する。
音楽・美術	生徒のグループの組み方を工夫する。
技術・家庭特別支援	授業を通してロールプレイを行う。学習内容に関連する実践を行う。電化製品について学ぶなど。

④チーム議論Ⅱにおけるミドルリーダーの関わり



(4)成果と課題

①本校職員アンケート 実施 平成22年12月17日(金)～22日(水)

【本年度「学校評価」研究指定校を引き受けて】次の項目を評価して下さい。

(4 大変そう思う - 1 全くそう思わない)

数字は人数

	4	3	2	1	平均
教科内のコミュニケーションが増えた。	9	12	3	1	3.1
教科内で共通理解が図れた。	10	14	0	1	3.3
同一歩調で指導ができた。	3	15	6	1	2.8
生徒の情意面で向上が見られた。	2	21	2	0	3.0
生徒の技能面で向上が見られた。	5	17	3	0	2.9

平均は、少数第二位を切り捨て

②成果

ア 教科間のチームワークの向上

- ・小グループに分けたことで、全員参画の意識が高まり、組織が活性化した。
- ・教科指導に一体感が持てた。活発な意見交換ができ、有意義だった。
- ・職場内でゆっくりと他の先生方と話し合い、意見交換をすることが少なかったもので、とても充実した時間だったと感じた。
- ・付箋に書き出すことで、お互いに上手くいっていることや困っていることがよくわかり、話し合いがしやすかった。またそれぞれの教科で、何が問題で、解決すべきことなのかがはっきりしたのがよかった。

本校職員の声

イ 授業力の向上

- ・互いの実践例や実践方法などを紹介し合い、教科で目指す方向性が確認できたのは、意義深いと思う。
- ・子どもの実態を把握し、授業の「ねらい」を教員間で確認することができた。
- ・短期的な目標を定めたことにより、円滑に教材研究に取り組むことができた。
- ・議論を重ねる中で、自分がいかに授業展開するかを明確にできたので、生徒も授業のねらいを明確に把握して取り組んでいたのではないかと思う。

ウ その他

- ・研究の考え方、進め方について理解することができた。
- ・検証のしかたがよくわかった。
- ・中間報告会を行うことで、やったらやりっぱなしではなく、最後までしっかり気を抜くことなくやり遂げられると感じた。
- ・他教科についても知ることができて良かったと思う。

本校職員の声

③課題

- ・アンケートやまとめについて、早く準備しなければいけないと感じた。
- ・議論していることが大きすぎて、どのように進めれば良いかが難しかった。

チーム議論Ⅰ

1. 現状把握

1) 生徒の関心・意欲・態度面

- ①古典学習に対する苦手意識が強い。
- ②古典読解における内容（要旨や人物の心情）の理解が不十分である。

2) 教師の指導面

- ①生徒に古典への興味・関心を持たせる授業作り。
- ②古典読解における内容理解ができる手立ての工夫。

2. 問題の設定と目標・方法の決定

1) **目標：自信をつけるための古典の音読**

2) 目標設定の理由

国語科では学習指導要領に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が明記されるなど、古典作品への学習が重要視されている。しかし、生徒達の中には、「何故、古典作品を学習するのか」、「古典作品は、難しい」という意識を過度に抱き、苦手意識を持つ生徒も少なくない。苦手意識を抱いたまま学習した結果、学習に対する向上心を失い、「授業内で意欲的に発表できない」、「自信を持って音読や発表を行うことができない」などの様子が見られる。

古典作品には、古来から共通の人間の考えや思いが多く描かれており、その文化的価値は学ぶに値するものである。古典学習に自信を持たせ、意欲を持って授業に取り組めるように指導したい。そのためには、まず「古典の音読に自信をもって取り組める」ようにすることが必要であると考えた。古典に書かれた古人の考えや思いを理解し、古典のおもしろさに気づかせるためには、文章が読めるということが前提となる。古典を自信を持って音読することによって内容への理解を深め、古人の考えや思いを読み取らせ、古典の持つおもしろさに気づかせたい。そうすることにより、「意欲的に発表する」、「関心を持って学習に取り組む」態度を育てたいと考えた。また、古典を音読することにより、古典特有のリズムや言葉の響き等を味わい、古典への関心を高められると考えた。

3. 指導方法

指導	1 年生	2 年生	3 年生
指導の期間	2010 年 9 月～10 月	2010 年 9 月～10 月	2010 年 9 月～10 月
指導の時間数	50 分×10 回	50 分×10 回	50 分×10 回
第 1 回アンケート	2010 年 9 月	2010 年 9 月	2010 年 9 月
第 2 回アンケート	2010 年 10 月	2010 年 10 月	2010 年 10 月

4. 実行

各学年に応じた古典作品を扱い、歴史的仮名遣いなどの基礎知識を十分に学習させながら、音読や内容理解を行う。

チーム議論Ⅱ

5. 実行状況のチェック

各学年に応じて毎時 10 分間ほどの音読時間を取り入れた。それにより音読への意識が高まり、「大きな声で読めるようになった」、「隣同士で音読をするのが楽しかった」といった生徒の感想が、アン

ケートの中で見られた。また、3年生では発展学習として俳句の創作を行った。その中で季語を用いた創造性溢れる俳句を創作し、古人に習い、簡単な文章を書くといった学習も取り入れた。「古人の思いに触れることができた」、「自分の考えを俳句や文章という形に表すことができた」などの感想が見られ、古典学習に意欲的な姿勢を示す生徒が多くなった。音読を基礎として、古典学習を行うことにより、自信をもって授業に臨む態度を育成することがチーム内で確認された。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

- ①基礎が定着していない生徒への対応。(個の指導)
- ②各学年や学級に応じた指導方法の工夫。
- ③自己表現の時間の確保、および充実。

2) 目標の再確認

目標：古典を材料に音読を行い、短作文等の自己表現力につなげる

7. 指導の検証 アンケート実施：平成22年9月、10月

対象：各学年抽出3学級

1) あなたは古典が親しみやすいと思いますか。

親しみやすい、少し親しみやすいと回答した生徒の割合

9月	10月
52.4%	63.7%

2) 音読練習が好きですか。

好きである、苦ではないと回答した生徒の割合

9月	10月
39.6%	52.8%

3) 古典に表れる人の考えや思いに親しみをもつことができましたか。

親しみをもつことができたと回答した生徒の割合

9月	10月
61.0%	73.3%

8. 成果と課題

1) 成果

音読に重点をおいて授業を行った結果、古典に親しみを持つ生徒が増えた。また、音読に対する苦手意識を持っていた生徒が、自信をもって授業に臨めるようになったことが上記のアンケートより分かる。

これにより、「意欲的に発表を行う」、「ノート整理を丁寧に行う」といった相乗効果も見られた。各学年に応じた作品を読む中で、作品に描かれた考えや思いに対して共感する生徒も増え、古典作品に習い、短歌や俳句、短文を創作するといった自己表現力を高める学習にもつなげられた。

2) 課題

古典に対する親しみを抱いた生徒が増えたが、依然として苦手意識を抱いたままの生徒もいる。歴史的仮名遣い等の知識が十分に定着していない生徒もおり、個への指導の重要性もチーム内で認識された。また、各学年や学級の学習状況や人間関係に応じて、音読の指導形態や学習内容への工夫が必要なことも確認できた。3学年では、自己表現力を高める学習内容に取り組んだ結果、うまく自分の考えや思いを表現することができない生徒がいた。自己表現力を高めることは、生徒たちが将来生きていくうえで必要不可欠なことであることを理解させる。今後も音読を中心とした基礎を大切に、自信をもって意欲的に古典の学習に取り組める生徒の育成を図っていきたい。

チーム議論Ⅰ

1. 現状把握
 - 1) 生徒の関心・意欲・態度で気になる点
 - ① 忘れ物、おしゃべり、寝てしまうなど、意欲に欠ける生徒がいる。
 - ② 社会的事象に関心が低く、「なぜ」「どうして」を知るよりも、試験に「どこが」「どのくらい」出るかのほうを知りたがっている。
 - ③ 発表が少なく、集団での学習ができていない。
 - ④ 書きながら話を聴いたり、関心が別のものに向いているなど、集中して授業者の話が聴けていない生徒がいる。
 - 2) 教師の指導面で、更なる工夫が必要だと思われる点
 - ① 問題の提示の仕方を工夫し、各単元の内容に対する興味・関心を喚起する。
 - ② 毎時間発表の場を設ける、お互いの発表をしっかりと聞かせる。
 - ③ 顔をあげて注目させ、話だけに集中するような姿勢を促す。
2. 問題の設定と目標・方法の決定
 - 1) **目標：しっかりと話を聴く姿勢・習慣の育成**
 - 2) 目標設定の理由

「人の話をしっかりと聴く、聴ける」ということは授業を受けるうえで、すべての基本になると考えた。この目標の実現によって社会科の学習は相乗的に向上すると考える。

生徒の中には忘れ物をしたり、授業の冒頭から話を聞き逃してしまったり、授業のテーマや課題、ポイントが分からなくなってしまう者がいる。しかし、しっかりと最初から話が聴けていれば理解度や関心も高まり、さらに、持続できれば、生徒はより集中して話を聞くようになるのではないか。また、生徒がお互いの意見を尊重し、耳を傾ければ、生徒の発言は増えていくであろう。生徒の発言が増えれば授業が盛り上がるであろうし、盛り上がれば学習意欲も高まっていくであろう。教員には生徒の集中力を高める場面の創出と持続させる取り組みが必要である。
3. 指導方法

各学年共通

 - ① 教師、発言者に注目させる。
 - ② 話を聴くときには「板書を写す」ことも含めて、他のことをやめさせる。
 - ③ 地図や図絵を掲示して顔をあげて全員で注目する場面を増やす。
 - ④ 忘れ物をしないように指導をする。
4. 実行

毎時間、はじめのある学習活動を心がけ、場面ごとに生徒が意識を切り替えやすくする。

チーム議論Ⅱ

5. 実行状況のチェック
 - ① 毎時間、つとめて地図・図絵を持参するようにしたが、国名や市町村名の変更などで地図・掛図が不足したり、使えない場合があった。
 - ② 時間的な余裕がないときなど、地図を活用できない時があった。
 - ③ 地図上で「北」を「上」と言ったり、社会科の用語を適切に使えていない場面が見られた。
 - ④ 「注目させる」「話を聴くために手を止めさせる」などにおいて、指導が不十分な点があった。
6. 方法の改善と目標の再確認
 - 1) 方法の改善
 - ① 地図を必ず持参する。
 - ② 生徒の聴く様子を把握するために、地図の指し方を工夫する。

- ③ 生徒が社会科学的な話に慣れるために、教師は適宜解説を交えながら、つとめて社会科の用語を使用する。
- ④ 余裕をもって授業を行い、書く場面、聴く場面をしっかりと切り替える。

2) 目標の再確認

目標：聴く姿勢を向上させ、やる気を育てる。

7. 指導の検証

実態の把握 9月、12月にアンケート実施 (対象 2、3年生)

表1 話を聴けているか (※ 人数は34人学級に換算した人数)

実 態		抽出学級A		抽出学級B		抽出学級C		全 体	
		9月	12月	9月	12月	9月	12月	9月	12月
聴けている	%	83.3	78.1	91.6	87.1	94.3	90.9	89.8	85.4
	人	28	27	31	30	32	31	31	29
聴けていない	%	16.7	21.9	8.3	12.9	5.7	9.1	10.2	14.6
	人	6	7	3	4	2	3	3	5

表2 心がけていること (※ 12月アンケートより)

実 態	抽出学級A	抽出学級B	抽出学級C
しっかりと聞く	62.5%	58.1%	48.5%
質問や発表をする	18.8%	29.0%	30.3%
忘れ物をしない	28.1%	45.2%	18.2%

8. 成果と課題

1) 成果

- ① 表1を見ると、9月から12月にかけて話を聴けている生徒の数は若干名の減少はあったものの、全体として概ねよく話を聴けている様子が見られる。生徒からは「内容がよくわかるようになった」「以前より集中して聞けるようになった」「質問して自分の疑問が解けていくのが楽しくなった」「社会科への苦手意識がなくなった」といった感想が多く寄せられた。「話を聴き方」が質的に向上している様子が伺える。
- ② 表2を見ると、しっかりと聴こうとする意識が高い学級では、試験の結果において高い習熟度として成果が表れた。また、発言できる場面や発問の機会を増やしたためか、学級によっては「質問や発表をする」形でがんばる生徒がふえた。
- ③ 他にも、地図を掛けるようになり、「地図に興味があった」「歴史の授業中でも(地球上の位置や距離を)イメージしやすかった」などの感想がみられた。

2) 課題

- ① 下位の生徒も関心を持てるように、授業内容の基準を適切に設定し、発問や資料の使い方などを工夫する。また、社会科の学習に必要な用語や言葉の習得を促す。
- ② 集団学習に対する意欲がより高まるように、グループ討議などの授業形態を取り入れたり、異なる習熟度の生徒同士でも、皆で取り組める学習課題などを取り入れる。
- ③ 生徒自身が地図を指すという作業などは、本人も周囲も楽しく取り組み、教室の一体感を感じることができたので、さらに地図や掛図の有効な活用の仕方を模索していく。
- ④ 話を聴く態度や意欲を持続するために、生徒に身近な話題を取り入れたり、静と動のある授業展開を心がける。

チーム議論 I

1. 現状把握

1) 生徒の関心・意欲・態度面で気になる点

- ①課題に対する取り組みの差が大きい ②学級内の学力の差が大きい
- ③説明、発表の場面でできちんと表現できない

2) 教師の指導面で、更なる工夫が必要だと思われる点

- ①効果的な小集団学習の指導法 ②効果的なチーム・ティーチング
- ③教科書・ワーク・ノートの使用法 ④発問の工夫
- ⑤発表できる雰囲気作り ⑥テストの事後指導

2. 問題の設定と目標・方法の設定

1) **目標：計算力を高める**

2) 目標設定の理由

現状把握の中で気になる点がいくつか挙げられたが、学級内の学力の差や個人差が大きいを取り上げた。また3つの学年が同じ目標で取り組めるということから「計算力をつける」に決定した。本年度の研究主題設定の理由にも取り上げたが、本校の生徒は計算問題等の機械的な回答を求めるものに関しては、意欲的に取り組むことも、目標設定の理由の1つである。

3. 指導方法

指導	1年生	2年生	3年生
指導の期間	2010年9月～12月	2010年9月～12月	2010年9月～12月
指導時間数	8分×35回	8分×35回	8分×35回
プレアンケート	2010年6月	2010年6月	なし
ポストアンケート	2010年12月	2010年12月	2010年12月

4. 実行

1年生は、正の数・負の数の計算、一次方程式の計算。

2年生は、指数の含まれる計算、文字式、連立方程式、式の値、等式の計算。

3年生は 2年の計算に2次方程式、根号の含まれる計算。

を授業のはじめの7～8分間で練習し、計算のしかたを毎時間確認した。

チーム議論 II

5. 実行状況のチェック

毎時間の観察評価や、どのような計算の間違が多いかを確認しあった。支援の必要な生徒に対しては計算の進めかたや、計算の仕方をその場で示したり、友人の援助で計算が進められるようにした。計算ができる生徒には、できるだけ時間をかけずに、また途中の計算式もきちんと残すよう強調した。計算の苦手な生徒を少しでも減らす手だての確認を行った。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

- ① 第1段階：基本的な正の数・負の数の計算ができる。
- ① 第2段階：文字式の約束を確認し加法・減法の計算ができる。
- ② 第3段階：方程式の計算が移項の考えを利用しできる。

2) 目標の再確認

目標：計算力を高める。

7. 指導の検証

1 学年

問 題	実行前	実行後
「 $-2+3-4$ 」という計算は $(-2) + (+3) + (-4)$ であることがわかり、計算できる。	理解していない 10%	理解していない 2%
「 $-12 \div 2 \times 3$ 」の計算は前から順番に計算 するか、すべて乗法にしてから計算する	10%	4%
$2x+3$ は $2x+3=5x$ のように計算しないで $2x+3$ のままである。	17%	1%
$3x+2+x-9$ の計算は x は $1x$ であると理解し $4x-7$ と計算できる。	17%	3%
$3(2x-4)$ の計算は分配法則をつかって $3 \times 2x - 3 \times 4$ とし $6x-12$ とできる。	17%	12%
方程式 $5x-2=3x+8$ を解くとき、移項の考えを つかって $5x-3x=8+2$ とできる。	22%	4%

2 学年

問 題	実行前	実行後
$12-18 \div (-6)$ の計算は割り算から先に計算し $12 - (-3) = 15$ とできる。	理解していない 4%	理解していない 2%
$4(x-4y)$ の計算は分配法則をつかって $4 \times x - 4 \times 4y$ とし $4x - 16y$ とできる。	7%	5%
「 $12xy \div 2y \times 3x$ 」の計算は前から順番に計算 するか、すべて乗法にしてから計算する	17%	11%
方程式 $x+3=5x+1$ を解くとき、移項の考えを つかって $x-5x=1-3$ とできる。	6%	4%
連立方程式を消去法で解くことができる。	18%	10%
$8x+2y=1$ を y について解くことができる。	21%	14%

8. 成果と課題

1) 成果

計算力が身についたか、という質問に学年順で93, 89, 92%の生徒がついたと思うと答えた。また定期テストの計算も向上していることがうかがえる。

2) 課題

移項の考え方や、等式の変形、因数分解、根号のある計算などまちがえるという生徒が20%近くいる。個別指導のあり方や技能の定着の仕方など工夫する必要がある。

チーム議論 I

1. 現状把握

1) 生徒の現状や課題、問題点

- ①個々の生徒への学習指導に十分に対応出来ていない。(知識・理解面)
- ②時間に余裕が無いのか、教材の準備と提示が十分でないためか、なかなか科学的思考力が育たない。(科学的思考・表現面)
- ③科学全般に対して関心が低い生徒がいる。人の話を聞き、自分の考えを自分の言葉で話すことに慣れていない生徒が目につく。学習内容を時間内に確実にノートに書き、後で見ても役立つノートをとることができる生徒を増やす必要がある。(関心・意欲・態度面)
- ④理科室が1つしかなく、実験器具や備品も十分に整備されていないため、充実した実験を効率的に行うことが難しく実験・観察の能力が高まらない。理科室が1つであるにも関わらず、統一した実験開始から片付け終了までの流れや約束がないため、実験開始までと片付けに多くの時間を取られ、実験そのものに余裕を持ってじっくり取り組めないことが多い。実験に取り組む際のマナーや安全についての配慮事項についても教師間の共通理解と指導が十分に出来ていないために起因する様々な問題(器具の破損、実験道具でのいたずら、危険行為など)がある。(実験・観察面)

2) 教師の指導面でさらなる改善が必要だと思われる点

- ①理科室、準備室の改修、整備。
- ②理科備品・消耗品の点検と整備。
- ③ティーム・ティーチング(3学年)の内容とその充実(実験時の役割分担、個別的学习への対応にも配慮)。
- ④実験・観察のスペースの確保(他の特別教室など)。
- ⑤実験器具の点検、修理、整備。
- ⑥理科の学習を支える4つの観点を育てるための学習内容や方法の検討。
- ⑦自由研究指導時の内容の共通化と図書室(参考図書の整備、配置)と協力した指導体制作り。
- ⑧新学習要領移行期の授業時間の増加に配慮した効率的な理科室の学年割り当て計画作り(学年、単元、実験内容、実施時間)。
- ⑨理科室使用時のマナー、基本的な実験の方法作りとその共通化。
- ⑩化学実験道具のキット化と配備。

2. 課題の設定と目標・方法の決定

1) 目標：安全に配慮して、実験を確実に行う

2) 目標設定の理由

数多く挙げられた現状における課題の中で、目標を「安全に配慮して、実験を確実に行う」に決定した。「目的意識を持って、意欲的に課題解決に取り組み、その結果を心豊かに表現できる生徒を育てる指導のあり方」というのが本校、理科の研究主題であるが、この解明のための基礎になるのが「実験・観察」である。「科学の方法」を学ぶ場でもある「実験・観察」の環境の改善が今、本校では最も重要な課題であると考え「生徒の一人ひとりが、安全に配慮し、準備から片付けまで実験を確実にできるようにする」ことを目指し、標記の目標を設定した。

3. 指導方法

・理科室整備、準備室改修	2010年 4月～12月
・実験キット準備、「実験のすすめ方」(マニュアル)作り	2010年 9月～11月
・指導期間	2010年 9月～12月
・プレアンケート	2010年 9月(2学年抽出)
・定着確認のための実験	2010年 12月
・ポストアンケート	2010年 12月(2学年抽出)

4. 実行

①理科室の整備、準備室の改修を行う。②化学実験用の「実験キット」を10組作成し、理科室後部の棚上に配置する。③「実験のすすめ方」(理科室での実験マニュアル)を作成し各学年共通に指導する。

チーム議論II

5. 実行状況のチェック

理科室の整備、準備室の改修に予想以上に時間がかかり、予定が大幅に遅れてしまった。実験キットも、既存の道具が破損・不足のため10セット分作るのに大変時間がかかった。無いものは購入し、修理して使える物は修理した。実験道具を入れる箱（10リットル程度のもの）も、安価で適当な物がなく、業者の方の協力を得てなんとかそろえることができた。キットなしの実験の場合「片付けや器具の洗浄の状況が把握できない」「準備や片付けに時間がかかり、余裕を持ってまとめができない」「ガラス器具の破損や高温物の取り扱いが危険である」などの状況が目立ったので、実験キットの中に洗浄用のブラシやスポンジを追加することにし、更に各実験台に台ふき、小ボウキ、軍手を備え付けた。軍手、小ボウキは安全のためにも役立つ。「実験のすすめ方」の方も現状や用具の変更に合わせて大幅に修正した。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

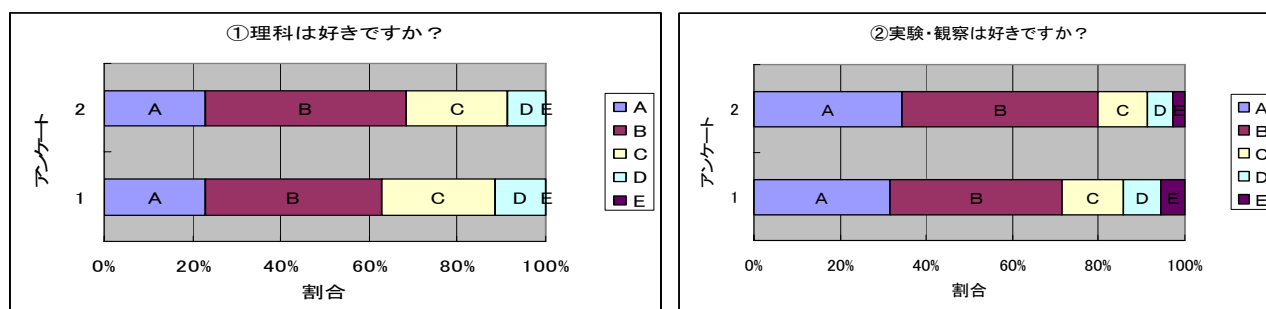
①理科室の整備、準備室の改修、理科備品、実験用具の点検、整備を更に進める。②化学実験用の「実験キット」の内容について検討し現状に合ったものに修正する。③「実験のすすめ方」（理科室での実験マニュアル）についても実験キットの内容や現状に合ったものに修正する。④安全に配慮し、各実験台にもいくつかの用品を備え付ける。

2) 目標の再確認

1) 目標：安全に配慮して、実験を確実に行う

7. 指導の検証

1) プレアンケート（1：9月実施）とポストアンケート（2：12月実施）の結果（2学年抽出）



A：あてはまる B：まああてはまる C：どちらともいえない D：あまりあてはまらない E：あてはまらない

2) 生徒の感想から

「試験管やビーカーなど必要な器具がキットに入っているの、準備が楽になった。」「机に小ボウキがついていて、こぼれた薬品を取るのに役立った。」「キットにブラシやスポンジが入っているの、自分の実験台の流しで試験管を洗うことができました。」「キット以外の薬品などは、また別に取りにいかなくてはいけないのでめんどくさい。」など。

8. 成果と課題

1) 成果

- ①「①理科は好きですか？」「②実験・観察は好きですか？」のアンケート結果では共に約6～10%ではあるが肯定群（A，B）が増えており、一定の成果がうかがえる。
- ②アンケートの結果からも「実験キット」や実験台に配備した用具は概ね好評で、片付けの最後に、自ら実験台をきれいに拭く姿が見られるようになった。

2) 課題

- ①今回、理科室などの環境整備と実験キット作りが大幅に遅れてしまい、2，3年生の実験・観察の単元に一部間に合わなくなってしまった。このため全クラスでの十分な検証が出来たとはいえない。1月から始まる1年生の実験・観察の中で更に、詳細に検証し、今後の改善に役立てたい。

チーム議論 I

1. 現状把握

1) 生徒の関心・意欲・態度面で気になる点

- ① 教師主体の授業ではできるが、生徒だけのパート練習は円滑に進まない。
- ② 学年が低いほど、周囲の様子を見ながら声を出す生徒が多い。
- ③ 自分の意見を述べたり、リーダーが指示をすることはあまりできない。
- ④ 楽譜やリコーダーなどを忘れる生徒がいる。

2) 教師の指導面で、さらなる工夫が必要だと思われる点

- ① 生徒の考えを引き出す発問の方法。
- ② 安心して演奏や発言ができる雰囲気づくり。
- ③ グループ活動の充実とリーダーの育成。
- ④ 忘れ物対策。

2. 問題の設定と目標・方法の決定

1) **目標：伸び伸びと自分の意見や思いを表現できる生徒の育成**

2) 目標設定の理由

音楽科の特性から見ると、現状における生徒の表現力不足は最も気にかかる課題である。特に1年生は、複数の小学校から入学してクラス編成されているため、気心知れた仲間同士というわけではなく、人前で歌うことや、自分の感想を素直に発言することに抵抗を感じるものも少なくない。それでは、音楽本来の演奏し表現する楽しみや、個々による音楽の感じ方の違いなどを知ることなく、音楽を深く味わえないであろう。そこで、人間関係を円滑にすることや少人数グループでの練習や発言の場を意図的に組入れ、人前での活動に対する抵抗感をなくせば、伸び伸びとした表現が引き出されるのではないかと考えた。

3. 指導方法

- 1) 表現活動が最も苦手な1年生で実施する。
- 2) 合唱では、パート練習の手順を明確にし、ルールを示す。
- 3) 鑑賞では、聞き方のポイントや感想の書き方を示す。

4. 実行（表現活動が苦手な1年生で実践する）

1) 合唱活動

- ① 同パート内で、2～3人のグループを組ませる。
- ② パート練習で十分に練習をさせ、グループごとに発表させる。
- ③ 教師が歌唱力のバランスを見て、意図的に各パートから1グループずつを選出し、合唱グループをつくり交互に発表させる。
- ④ 相互評価をさせる。
- ⑤ 楽譜に注意点を書き込ませる。

2) 鑑賞活動

- ① 感想は自分が感じたことであり、他者と同じでなくてもよいことを予め伝えておく。
- ② 鑑賞の前に聞き方のポイントを説明する。
- ③ 音楽のどのような点からそのように感じたのか理由を具体的に説明させる（書かせる）。
- ④ 音楽的な語彙が少ないために表現ができないことも考え、語彙を指導する。

チーム議論 II

5. 実行状況のチェック

1) 合唱活動

- ① 音楽的な素養のある生徒がいるパートは、自主的なパート練習ができる。

- ② 教師がチェックしないと、正確な音程やリズムで歌えていないところがある。
- ③ 少人数のグループは、気の合う同士で編成したほうが、声も出やすく、意見交換なども自主的に行えるなど、活発に活動している。

2) 鑑賞活動

- ① 人間関係の浅い生徒同士の集まりでは、なかなか発言ができない。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

- ① パート練習では、音楽的な能力の高いリーダーを教師が選出する。
- ② 少人数のグループは気の合う者同士で構成するなど、各パートから1つずつ組み合わせるときは、音楽の能力的なことも含めて考え、教師が意図的に組む。
- ③ 評価は良いところを見つけて励ますことから始め、慣れてきたら3（良い点）：1（改善点）の割合で意見を吸い上げる。なお、改善点が出た場合は、どのようにすれば改善されるかその方法を教師が助言して、自信を失わせないように配慮する。
- ④ 発言が出そうもない場合は、小グループに分け、その中で順番に全員が発言するようにする。

2) 目標の再確認

目標：グループ活動を意図的に取り入れ、自他を尊重する精神を育て、のびのびと表現活動ができる生徒を育成する。

7. 指導の検証

合唱コンクールの反省カードを読む限りでは、ほとんどの生徒がとても楽しんで取り組んでいた。また、歌唱テストの際も人前で堂々と歌える生徒が増えた。

鑑賞の授業では、「良かった」という感想から、「〇〇の部分でリズムが速くなったから、聞いていてわくわくした」というように、音楽的な言葉や具体的な理由を発言できる生徒が増えた。

8. 成果と課題

1) 成果

- ① 生徒の自主的な合唱練習は、グループ練習の中でお互いを認め合う活動を頻繁に取り入れ頑張ったことを取り上げて評価することの繰り返しで、少しずつ活発化してきた。
- ② 鑑賞活動の発表では、発表の形をある程度モデル化して示すことで、文章の組み立て方や鑑賞のポイントなどがわかり、堂々と発表できる生徒が増えてきた。

2) 課題

- ① グループ活動では、生徒の人間関係を考慮しないと消極的になってしまうことは否めず、担任と協力して日ごろからの人間関係の構築を図っていかなければならない。
- ② 鑑賞での発表内容は、パターン化しなくても発言したり、いろいろな発想で発言できるようにならないと、本当にのびのびと発言していることにはならないのではないかと思う。更に音楽的な経験をさせ、感じ取る心を育てたい。

チーム議論 I1. 現状把握

- 1) 生徒の関心・意欲・態度面で気になる点
 - ① 苦手な題材だと集中力が続かない生徒がいる。
 - ② 感想等は書けるが、発表は消極的な生徒が多い。
 - ③ 話し合いを進められない班がある。
 - ④ 進度差が大きく、互いに学び合う姿勢が不十分。
- 2) 教師の指導面で、さらなる工夫が必要だと思われる点
 - ① 集中力が持続できるような題材設定の工夫。
 - ② 安心して発表できるような雰囲気作り。
 - ③ 話し合いやグループ活動の充実。
 - ④ 互いに思いを伝え、学びあえる授業構成の工夫。

2. 問題の設定と目標・方法の決定1) **目標：のびのびと自分の意見や思いを表現できる生徒の育成**2) 目標設定の理由

美術科では、思いをのびのびと表現することが、自分らしい作品の完成や鑑賞活動での発表につながる。今までは、個の力を引き出すために題材や道具の工夫等を目標に設定して取り組んできた。このことにも引き続き取り組んでいこうと思う。

さらに、今回の研修で音楽科と共に議論することで、個の力を引き出すためには、話し合いやグループ活動を充実させることが効果的であることに気付いた。音楽・美術共に関心意欲や技能等の個人差が大きく、表現することでそのことが作品や発表で明らかとなる教科である。そのため、思春期の生徒達にとって思いっきり表現することは、恥ずかしいと思うこともあるだろう。その思いを抱えつつ、のびのびと表現や発表するためには、互いの人間関係がよりよいことが欠かせない。そのような関係づくりを授業でも行う必要を感じた。グループ活動への主体的な取り組みをさせるために手だてを工夫し、自他を尊重する精神を養い、互いの良さを認め、学び合いながら「のびのびと自分の意見や思いを表現できること」を目標に設定した。

3. 指導方法

- 1) グループ活動や話し合いを取り入れた授業の題材を設定する。
- 2) 話し合いの手順を明確にする。
 - ① リーダーを決める。
 - ② 順番に全員が発表する。
- 3) ルールを明確に示す。
 - ① 相手の良いところを見つけて発表する。
 - ② 互いを批判することはしない。
 - ③ わからないところは質問し、教え合う。
- 4) 語彙を増やす。(例を挙げる。)

4. 実行

- 1) 1年生一「生活とデザイン」をテーマに、身近な文房具やスポーツ用具などで、気に入っている物の紹介をワークシートにまとめ、班内で発表し合った。
- 2) 2年生一「身近なマークに注目しよう」をテーマに身のまわりの公的なマークや企業のマークを各自1つ選び、色や形、コンセプトについてワークシートにまとめ班内で発表し、班の代表者の内容を教員がクラスに紹介をした。
- 3) 3年生一「身近な物のパッケージに注目しよう」をテーマに、お菓子やジュースなどのパッケージで気に入っている物や工夫されている物を探し、形や色などについてワークシートにまとめ、班内で発表した。班の代表者1名は、OHCを用いてクラス全体の前で発表した。

発表を聞いたときの質問や意見、授業を終えての感想をワークシートに記入した。

チーム議論 II5. 進行状況のチェック

9月～10月に、1から3学年(合計17クラス)でグループによる話し合い活動による授業を実施した。授業後のアンケートの結果を以下に記す。

- ・ 班ごとの発表会で自分以外の人の思いや工夫に気付き、視野が広がった。
- ・ 他の人の発表を聞いて自分もさらに頑張ろうと思った。
- ・ 話し合いの司会や発表の順番が決まっていたので進めやすく楽しかった。
- ・ 話し合う内容が色や形について決められていて、ワークシートに記入したことを発表したことで、迷うことなく伝えることができた。
- ・ 丁寧に詳しく調べているワークシートをみて感心した。

- ・班代表の発表をさせられた。
- ・班で発表したくなかった。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

- ① 良いことは言えるが悪いこと、不十分なことは言わず、記入もしないような雰囲気伝わった。直すべきところ、努力するべきところも素直に出し合い受け入れることのできる関係をつくっていききたいので、相手の意見を共感持って受け止め、自分の意見を冷静に伝えることができるような方法を伝えていきたい。
- ② ダメ、下手、上手、良いでとどまらず、さらによりよくするためにはどうするかという視点で、発展的な話し合いになるように助言していきたい。
- ③ 生徒の努力しているところ、長所を言葉で伝え、認めて向上心を持たせるような声かけをしていく。
- ④ 生徒の変化に気付き、変化を感じたら担任や学年の先生方に生徒について話しを聞く機会を増やし、グループを決める時などに配慮する。
- ⑤ 自他を尊重し、話をしっかりと聞く態度を育て、作品の内容で代表者を公平に決定することを徹底する。
- ⑥ ワークシートがうまくまとめられなかった生徒が発表時にいやな思いをしたことがあった。他人を傷つけることは言わないなど発表を聞く態度の基盤となる思いやりの心を育てたい。

2) 目標の再確認

目標：**グループ活動を通して自他を尊重する精神を養い、のびのびと自分の意見や思いを表現できる生徒の育成**

7. 指導の検証

アンケート実施：平成22年9月、12月

対象：2年生 各1クラス

1) あなたは美術が好きですか。表1

	好き	嫌い
9月	89. 7%	10. 3%
12月	96. 6%	3. 4%

2) あなたは話し合い活動が好きですか。表2

	好き	嫌い
9月	46. 4%	53. 6%
12月	53. 6%	46. 4%

3) あなたは発表することが好きですか。表3

	好き	嫌い
9月	30. 8%	69. 2%
12月	34. 6%	65. 4%

8. 成果と課題

1) 成果

- ① グループの中で、しっかりとした考えを発言できる生徒がいるとき、良好な人間関係ならばその能力を素直に認め、ふさわしい役割を推薦や立候補で決めることができる。しかし、関係がうまくいっていないときには、その生徒は「発表を押しつけられた。」「進行係をやらされた。」と感じ、嫉妬される場合もあることが、アンケートや生徒の会話から確認された。チーム議論を実施し、方法を改善することで、表1, 2, 3のようにわずかではあるが好きと思える生徒が増えた。
- ② グループで意見を出し合うとき、自他を尊重する精神が養われていれば、全員が安心して発表することができる。また、聞いてもらい嬉しいと感じることで、次への意欲につながるとわかった。表1, 2, 3の数値は、授業の感想に書かれていた「少し好きになった。」「楽しくなった。」「色々と美術に対する思いが変わった。」という思いが数値として表れたと考えられる。

2) 課題

- ① 一人の優れた生徒がいれば、そのグループ全体が高まっていくはずである。そのことを互いに認め合うことのできる集団となるよう対話することを忘れずに育てていきたい。
- ② 今後もグループ活動を取り入れて、制作の過程や完成した作品を鑑賞しあうことなどの機会を増やしていこうと考えている。
- ③ 美術では個性を発揮し、表現することが重視されることも多い。しかし、他と異なる新しい発想であるだけでは不十分である。授業を通して、美術によって生活がより豊かになることに気付かせたい。
- ④ 互いを尊重することで制作や発表の意欲が向上することを感じ取り、自分の意見や思いがのびのびと表現できる環境を一人一人が作り上げようという姿勢や、コミュニケーション能力が身につくような指導を目指し、題材設定の計画を工夫していきたい。

チーム議論Ⅰ

1. 現状把握

1) 授業における問題点

- ①体力や技能だけでなく、関心・意欲面での格差が激しい。
- ②運動が苦手な生徒、嫌いな生徒への対応が不十分ではないか。

2) 解決するために必要な点

- ①運動が苦手、嫌いな生徒とのコミュニケーションをできるだけ多くとるようにする。
- ②指導法の改善（特に、運動嫌いの生徒に対する個別的な手だてをする）
- ③保健体育科の教員相互の連携をとるようにする。
- ④保健室との連携を綿密にし、生徒の情報を得るようにする。

2. 目標の設定

1) **目標：まず生徒理解に努め、その情報を共有する**

2) 目標設定の理由

授業における問題点を解決し、その延長線上として、生徒一人ひとりが充実した学校生活を送るためには、生徒理解に努め、その情報を共有することが重要であると考えた。本校の生徒は落ち着いており、一斉型の指導を行いやすいが、その一方で授業に乗り切れず、不完全燃焼を起こしている生徒もいる。その様な生徒達に目を向けないままでは、よい授業を作ることはできず、生徒の学力も向上しない。生徒の学力を向上させるためにも、生徒理解に努め、情報を共有する中で、生徒や集団にあった指導法を検討することは重要であると考え、一つ目の目標として「生徒理解と情報の共有」を目標に設定した。

3. 指導方法

①生徒理解

- ・生徒とのコミュニケーションを増やし、生徒理解に努める。
- ・保健室との連絡を密にし、見学の多い生徒、欠席の多い生徒についての情報を得る。

②情報の共有

- ・保健体育科の教員間の連携を密にし、生徒についての理解に努める。
- ・指導方法について、情報交換や検討を多く行う。（教科部会だけでなく、雑談のレベルで）

4. 実行

「チームで議論Ⅰ」は夏季休業期間に行ったが、保健体育科の研究実践は、教員の意識をあげることからスタートしたので、授業開始前から実行した。授業開始と同時に、様々な試みを実践した。

チーム議論Ⅱ

5. 実行状況のチェック

生徒理解がどれだけ図れたか、その情報がどれだけ共有できたかを確認した。生徒の理解が以前に比べてできるようになったことが確認された。しかし、職員室が分かれている点などの施設的な問題から、情報の共有化が思うように進んでいないことが問題点としてあげられた。そこで、もう一度、生徒理解と情報の共有化および指導法の検討の重要性を確認し、具体的に教員の行動目標を立てることにした。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

- ①教員間の連携をとるようにし、情報の共有化に努める。
- ②保健室に一日一度は顔を出し、生徒理解に努めると共に、養護教諭との連携を密にとる。

2) 目標の再確認

目標：共有化した情報を生かした授業を展開する

7. 指導の検証 アンケートの実施：平成22年10月、12月

対象：2年生男女全員 4段階評価で回答

①体育の授業は好きですか 「はい」「どちらかと言えば、はい」の生徒の割合

10月 85.2% 12月 89.2%

②仲間と協力し合っていますか 「はい」「どちらかと言えば、はい」の生徒の割合

10月 88.3% 12月 92.8%

③先生からアドバイスをもらいますか 「はい」「どちらかと言えば、はい」の生徒の割合

10月 73.8% 12月 76.5%

④保健の学習内容を日常生活で活かしていますか。「はい」「どちらかと言えばはい」の生徒の割合

10月 63.7% 12月 66.3%

8. 成果と課題

1) 成果

アンケートは10月と12月に行った。アンケートを行った間隔が短いこと、途中で実施する種目が変わっていること、などを考えて結果を見なければならぬが、肯定的に考える生徒が若干増えている。教師の取り組みによって、生徒の意識が変わることの表れであろう。

生徒の理解とその共有化から、指導法を検討することについては、次のような事例があった。3年のハンドボールの授業において、球技の苦手な生徒から「得意な奴だけのゲームになってつまらない」「どうせ、守りしかやらせてくれない」との意見があった。教師間でその情報を共有化すべく話しをしたところ、以前にもその様なことがあったとのことだった。そこで解決方法を検討し、チーム編成の工夫とルールを工夫を行うことにした。チーム編成はそれまで行っていた「戦力が均一のチーム」でなく、初めに「得意グループ」と「苦手グループ」に分け、その中でチームを編成するようにした。グループ分けする際には、言葉かけなどの配慮が必要だが、それまで以上に、苦手だった生徒の運動量が増え、質の高い学習をすることができた。また、「パスを3人以上通すと2点」などの特設ルールを設けることで、それまでパスをもらえなかった生徒も活躍する場面が増えた。

このように、生徒理解に一層努め、情報を共有化する中で指導法を検討することで、生徒の学習意欲は向上し、質の高い授業を展開することができた。

2) 課題

アンケートにあるように、「先生からのアドバイスをもらうことがありますか」で、「はい」または「どちらかと言えば、はい」と答えた生徒が少なかった。今回の取り組みでも、それほどの上昇は認められない。今回の研究では、この部分を向上させたいと考えていたが、まだ結果に至っていない。この原因として、教師からの働きかけが少ないこと、教師のアドバイスが的確でないことの2点が考えられる。1つ目については、特定の生徒に集中してしまい、その結果「アドバイスをもらえない」と感じる生徒が多いとも考えられる。この点については、教師の指導力の問題であるので、今後一層の授業研究を重ね、多くの生徒が「アドバイスしてもらっている」と感じる授業を目指したい。

また、2つ目については、「生徒が求めるアドバイスでない」ことが考えられる。教師はアドバイスをしているつもりであっても、生徒はアドバイスと受け取っていないと思われる。これを解決するためにも、生徒理解と情報の共有化を更に進める必要がある。生徒一人ひとりを理解し、どのような言葉がアドバイスとして有効なのか、逆にどのような言葉は萎縮してしまうのかを、教師が理解し、共有化していくことで、有効なアドバイスが増えると考えられる。

保健体育は生徒にとって好きな授業の一つである。その授業をより充実したものにするとともに、いわゆる「体育嫌い」をなくすためには、教師がどれだけ生徒を理解するかが重要になる。研究の成果と課題をふまえて、さらに充実した授業が展開できるように、一層の研究を重ねたい。

技術・家庭科

チーム議論Ⅰ

1. 現状把握

1) 生徒の現状や課題、問題点

- ①生徒の関心・意欲が低く、受動的に授業に参加している。
- ②授業内の言語活動が活発ではない。
- ③生徒間において互いに助け合う力が弱い。

2) 解決するために必要な点

- ①生活に生かせるような授業を組み立てる。
- ②授業内において、言語活動により多くの時間を割く。
- ③チーム・ティーチングを行う時間を設ける。

2. 目標の設定

1) 目標:授業で学んだことを、家庭で実践させる

2) 目標設定の理由

数多く挙げられた現状における課題の中で、目標を「授業で学んだことを、家庭で実践させる」に設定した。これまで授業を行う中で、「生徒が積極的に授業に取り組む力」が弱いと感じたことや、本校研究主題「確かな知識と技術を活かし、生活に生かせる学習指導の工夫」から、本目標を設定した。授業で学んだ内容をインプットするだけに留まらずに、アウトプットする場面を設け結果を評価することによって、生徒が学ぶ意義を実感し、関心・意欲を持って授業に取り組むことを目指す。

3. 指導方法

指導	期間
エネルギー変換の単元	10月初旬
プレアンケート	10月中旬
家電製品における消費電力	12月上旬
ポストアンケート	12月下旬

4. 実行

宿題として、授業で学んだ電化製品における消費電力と、電力会社の設定した電気料金表を用いて、実際に家庭で使用している家電製品の電気料金を求める。

チーム議論Ⅱ

5. 実行状況のチェック

10月上旬にプレアンケートを行った。エコ家電が多く普及している現代の社会状況において、エアコン等の電気料金がいくら位かかるのかを全く知らない生徒が大半を占めていることが確認できた。また、理科と技術科との連携をより密にすることが必要ではないかといった意見も出た。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

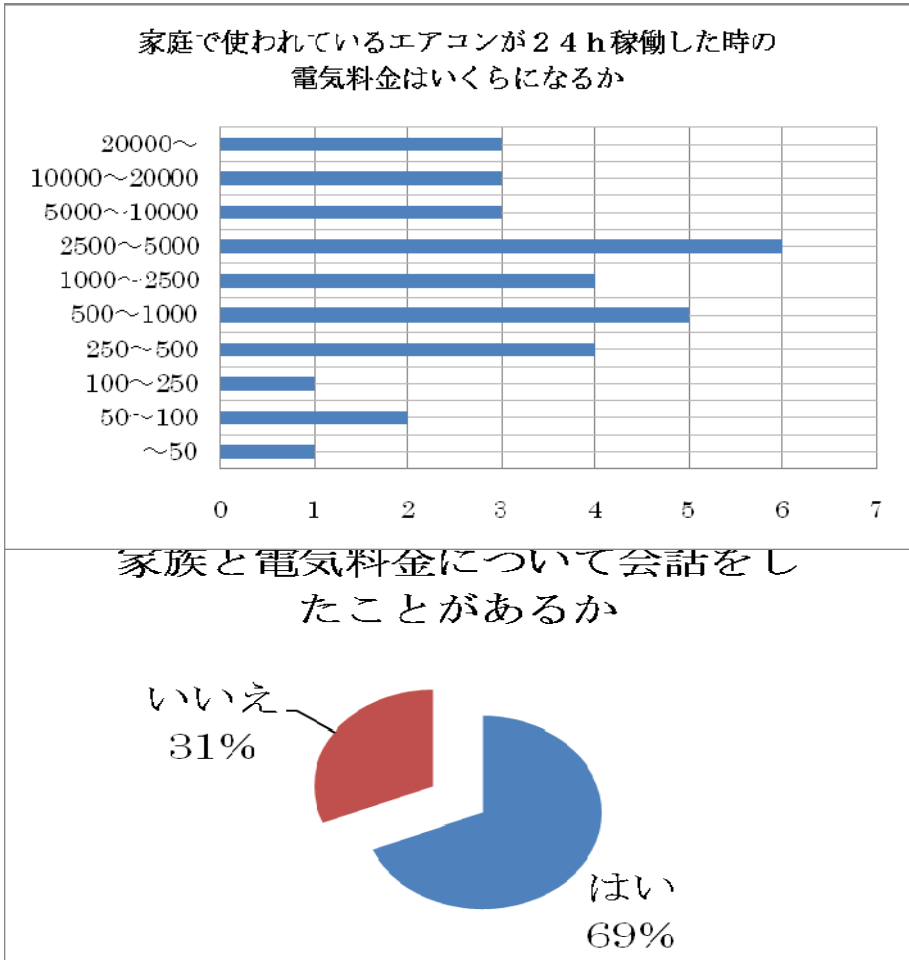
- ①生徒の「電気」に対する知識・理解を深めるために、理科との連携を図り、抵抗や電流、電圧についても授業で扱った。
- ②宿題として、家電製品の電気料金を調べる前に、校内の電化製品を用いて、電気料金を求める模擬練習を行った。

2) 目標の再確認

目標:授業で学んだことを、家庭で実践させる

7. 指導の検証

1) プレアンケート（10月実施）とポストアンケート（12月実施）の結果（2学年抽出）



左図の示すように、プレアンケートでは家電製品の電気料金についての知識・理解はない状態であったが、ポストアンケートでは、ほとんどの生徒（32人中30名）が適切な24h稼働時の電気料金を計算によって求めることができるようになった。

左図の示すように、プレアンケートでは、家族と電気料金について会話をしたことがある生徒は全体の3分の2程度であった。しかし、家族と電気料金についての会話をしたので、ポストアンケートでは、全生徒が同質問にたいして、「はい」と回答した。

2) 生徒の感想から

「電力会社の料金制度を知ることができた。」「エコ家電では、昔よりも電気料金が安くはな

ったが、つけっぱなしにしているのは、やはり、相当額の無駄になることがわかった。」「両親に対して、もったいないでしょと電気の消し忘れに対して注意した。」など。

8. 成果と課題

1) 成果

①授業でインプットした知識を実生活の中（今回は消費電力を調べるといった形）で、アウトプットすることができた。

②アンケートの結果からも、「電気をつけているともったいない。」といった発想から、「数時間つけっぱなしにしていれば、消費電力から、相当額が無駄になる。」と、具体的な数値で、省エネルギーについて考えられるようになり、関心・意欲が高まった。

2) 課題

①短期間でのデータしか得られなかったため、十分な検証が出来たとは言えない。さらに長期的な視野で取り組むべき目的であるので、今後も検証していき、自己の成長に役立てたい。

チーム議論Ⅰ

1. 現状把握

1) 生徒の関心・意欲・態度面

- ①授業への取り組みが消極的。
- ②意欲の差が大きい。

2) 教師の指導面の工夫

- ①生徒に興味・関心を持たせられるような授業の展開。
- ②生活に生かすことのできる授業内容(教材)。
- ③実習授業における個別指導の仕方。
- ④授業環境の整備。

2. 問題の設定と目標・方法の決定

1) **目標：授業で学んだことを家庭で実践させる。**

2) 目標設定の理由

技術・家庭科の学習内容は生活にそのまま生かすことができる。しかし、実際に授業で学んだことを家庭で実践する機会は少ない。また、技術・家庭科は実習が多く、一度で身につけることが難しい内容ばかりである。そこで、まずは宿題で家庭での実践を行い、自分がどれだけできるのか、自信をつけさせようと思い、この目標を設定した。

3. 指導方法

各授業において、学習内容をどのように生活に生かすことができるのかを生徒に伝える。

《2年生》

- ・りんごの皮むきテスト
- ・調理実習(ハンバーグ、さんまのかば焼き)

《1年生》

- ・冬休みの宿題として、家庭での自分の仕事、手伝いをする。

4. 実行

2年生のりんご皮むきテストは、皮をむく速さではなく、丁寧さや家庭で食べやすいむき方にむくようにした。また、そのまま食べるのではなく、アップルパイを作り、簡単に調理ができることを示した。

1年生は、家庭での自分の役割を知るために、毎日の自分の仕事や手伝いをした。

チーム議論Ⅱ

5. 実行状況のチェック

9月末に2年生のテスト、冬休み中に1年生の宿題を行った。2年生は、調理に興味・関心が高く、率先して調理をする生徒も多かった。1年生は、日ごろ当たり前のようになっているお手伝いを、家庭科の学習として考えることが難しいようだった。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

- ①家庭での実践方法を授業内で伝えることは継続する。
- ②1年生は、被服分野に入るので、新たに関連する実践を行う。

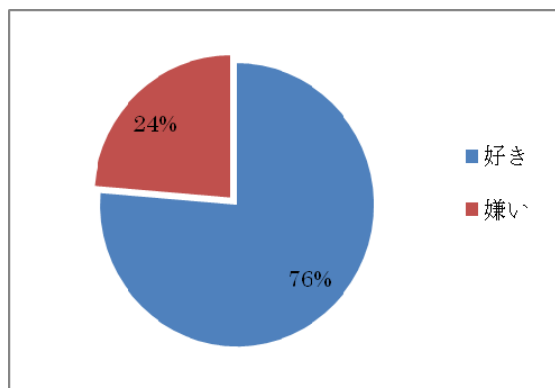
2) 目標の再確認

目標：授業で学んだことを家庭で実践させる。

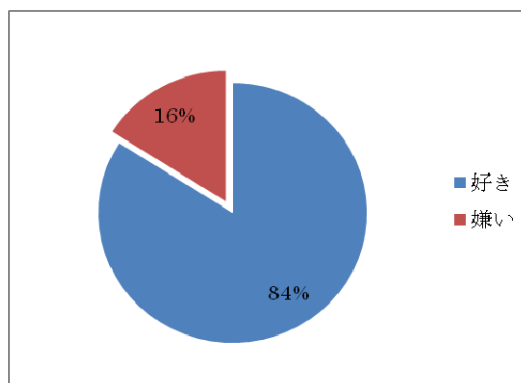
7. 指導の検証

《家庭科が好きであるか》

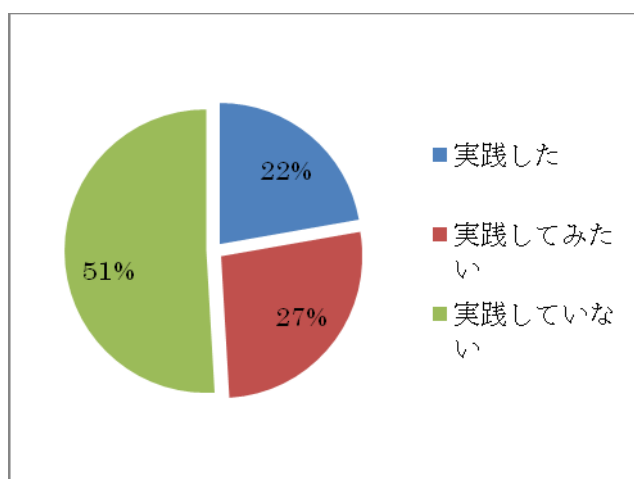
1年生 11月上旬アンケートより



1年生 12月下旬アンケートより



《家庭科の授業で学習したことを実践したか》



8. 成果と課題

1) 成果

2回のアンケート調査により、家庭科という教科を好きという生徒が8%増加していた。また、家庭科に興味関心がある生徒も79.4%と高く、家庭科に対する興味関心を高めることはできた。実際に学習した取り扱い絵表示を見ての洗濯やしみぬきをする生徒もいて、家庭で実践することの楽しさがわかってきたようだ。

2) 課題

家庭科の興味・関心は高くなったということはわかったが、家庭で実践をしていない生徒は51%と、まだ家庭科と生活を結び付けることは難しい。もっとより生活に生きる教材を学習することにより、生徒も家庭で実践しやすいと考える。これからも教師が、視覚的教材を多用し、魅力ある授業を展開していきたい。

チーム議論Ⅰ

1. 現状把握

1) 生徒の関心・意欲・態度面で気になる点

- ①話す活動への取り組みが消極的。 ②コーラスリーディングで声が出ない生徒がいる。
 ③授業への意欲が低い生徒がいる。 ④学級内の学力差が大きい。

2) 教師の指導面で、更なる工夫が必要だと思われる点

- ①英語が楽しいと思われる雰囲気作り。 ②言語活動に対する評価方法の工夫。
 ③効果的なティーム・ティーチング。 ④各レッスンで、4技能をバランスよく指導する工夫。
 ⑤語彙指導の工夫。 ⑥教科書・ノート・ワークの使用法。
 ⑦ペア・グループ活動の充実。 ⑧効果的なテストの事後指導。

2. 問題の設定と目標・方法の決定

1) 目標：2分間継続して英語で会話できる生徒の育成

2) 目標設定の理由

数多く挙げられた現状における課題の中で、目標を「2分間継続して英語で会話できる生徒の育成」に決定した。この目標は、本年度の英語科研究主題であり、4月より計画的に研究を進め、すでに予備的調査も行っているからである。4月下旬に行ったアンケート調査の結果を見ると、「最もつけたい英語力」の筆頭に挙げられたのが「話す力」であり、新指導要領でも「4技能を統合的に育成すること」が新しく追加された。4技能をバランスよく育てるには「習得」と「活用」の両輪を回していくことが不可欠である。何度も音声を聞き、音読練習を十分に行った上で、教科書の内容を中心に「英語で会話を2分間継続できること」を目標に設定した。

3. 指導方法

指 導	1 年 生	2 年 生	3 年 生
指導の期間	2010年10月～12月	2010年4月～12月	2010年4月～12月
指導時間数	20分×6回	20分×10回	20分×10回
プレアンケート	なし	2010年4月	2010年4月
ホワイールアンケート	2010年10月(学校評価)	2010年9月(学校評価)	2010年9月(学校評価)
ポストアンケート	2010年12月(学校評価)	2010年12月(学校評価)	2010年12月(学校評価)

4. 実行

教科書を十分にインプット(音声を十分に聞き、何度も音読練習を積む)した上で、教科書の内容に基づき、グループでアウトプット(話す)を中心とした言語活動を行う。

チーム議論Ⅱ

5. 実行状況のチェック

9月と10月に、1年生は2回、2,3年生は4回「2分間トーク」を実施した。アンケートや観察評価から、話すことに積極的な生徒が多いことが確認できた。その一方で、支援の必要な生徒の「英語で話すことへの抵抗」を和らげるため、正確さ(accuracy)には重きを置かず、(流暢性)fluencyを重視する事を再確認した。段階的な指導も取り入れ、苦手意識を持つ生徒を少しでも減らす手立ての必要性もチーム内で確認された。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

- ①第一段階：十分なインプットを行う。 ②第二段階：セクションごとにミニトークを行う。
 ③第三段階：「2分間トーク」を行う。(段階的な指導を大切にすることを確認)。

2) 目標の再確認

目標：2分間継続して英語で会話できる生徒の育成

7. 指導の検証 アンケート実施：平成22年4月、9月、12月
対 象：2,3年生抽出4学級

1) 【英語で2分間トーク】の自己評価 (数字は%)

学習者(上位者) 表1

	4月	9月	12月
A	57.7	92.1	93.3
B	38.4	6.6	6.1
C	3.9	1.3	0.6

学習者(中位者) 表2

	4月	9月	12月
A	41.1	72.2	73.4
B	48.6	22.9	23.3
C	10.3	4.9	3.3

学習者(下位者) 表3

	4月	9月	12月
A	14.6	23.1	25.8
B	48.0	39.4	39.1
C	37.4	37.5	35.1

- A 2分間英語で会話が継続できた。
B ほぼ2分間英語で会話が継続できた。
C 沈黙することが多かった。

2) あなたは、【英語で2分間トーク】は楽しいと思いますか。 表4

楽しい、少し楽しい と回答した生徒の割合	4月	9月	12月
	62.7%	75.8%	76.3%

3) あなたは、【英語で2分間トーク】は英語で話す力の土台作りになるとと思いますか。 表5

思う、少し思う と回答した生徒の割合	4月	9月	12月
	80.7%	86.3%	86.3%

8. 成果と課題

1) 成果

- ①指導効果の検証には、情意面のアンケートを質問紙で3回実施した。表4を見ると、9月のアンケートでは、「2分間トークは楽しい」と回答した生徒が4月よりも22.1%も上昇し、高い意欲の向上が確認された。
- ②指導効果については、3群に分けて分析をした。表1、表2を見ると、9月の「2分間トーク」で自己評価を「A」とした者が、4月よりも上位者では34.4%、中位者では31.1%上昇し、上位者と中位者にとって、指導効果が高いことが確認された。
- ③意欲的に活動できた生徒が多く、表5を見ると、この活動が役に立つと考えている生徒が9割近くに達した。生徒の感想には「英語で話して伝わった時がうれしい」、「日本語でしか話をしない友達と、英語で会話することは新鮮」、「英語を話す力や聞く力がつく」、「仲間との仲がより深まる」、「来年もまたやりたい」など、肯定的な意見がほとんどであった。

2) 課題

- ①表3を見ると、下位者で自己評価「A」をつけた者が14.6%(4月)、23.1%(9月)、25.8%(12月)と、大きな数値上昇が見られなかった。内容が難しく、活動が困難であったと考えられる。今後はより一層十分なインプットを行い、学習内容の定着を図ると共に、グループ内の人間関係の構築のため、振り返りシートにも工夫を凝らし、安心して活動できる雰囲気も育てていく必要がある。各学習者の英語力にも十分配慮し、学習者のレベルに適した活動ができるよう、教材の工夫も重ねて行きたい。
- ②ごく一部であるが、間違いを恐れて長い時間沈黙してしまう生徒がいる。ネイティブ・スピーカーでも文法を間違えて話すこともあるし、洋画を見ていると、単語だけで会話が成立している場面も多く見られる。「通じることが最優先」という意識を再度生徒に意識させたい。

チーム議論Ⅰ

1. 現状把握

1) 授業における課題・問題点

- ① 生徒の興味・関心のもてる授業設定。
- ② 授業だけではなく、生活に生きる授業の設定。
- ③ 個別指導の充実。

2) 解決するために必要な点

- ① 環境整備。
- ② 言語活動を充実させた授業。
- ③ 授業の組み立て方。

2. 問題の設定と目標・方法の設定

1) 目標：授業で学んだことを家庭で実践する。

2) 目標設定の理由

特別支援教育における学習においては、繰り返し単元をおこない、学力の定着を図っていく。また、生徒たちは興味や関心をもたなければ、授業に集中して臨むことが難しい。そのため、生徒の実態に応じた、興味・関心をもてる授業設定が必要となる。現在、ノーマライゼーション、共生社会の形成が求められている。その中で障害をもつ人たちが、いかに社会生活に順応していくかが課題である。生徒たちが社会に出た時もいくつもの困難にぶつかるであろう。そのときに真っ先に助けてくれるのが、育ての親である両親になるだろう。しかし、子どもたちは親よりも当然長生きをする。近くに手を差し伸べてくれる者がいなくても、一人で生きていくことのできる力を、この中学校生活で培ってってもらいたいと願いこの目標を設定した。通常学級の生徒においては、社会に出たときに障害をもった方が、困難に直面している場面を見かけたときには、真っ先に手を差し伸べていくことができる、思いやりをもった大人へと成長してもらいたいと願っている。

3. 指導方法

① 授業単元の設定。

- ・数学においてお金についての単元を設ける。そこでは、段階に応じた授業を展開していく。第一段階では、お金の価値について学んでいく。二段階目として、おつりの概念をつけさせていく。最後の三段階目においては、実際に野菜やお菓子などを準備して、売り手・買い手に分かれてお買い物のごっこを行う。
- ・生活単元学習において、実際にスーパーやパン屋に行き買い物を行っていく。

② 情報の共有

- ・学校で学んできた内容を家庭に報告をしていく。また、実際に買い物に生徒と一緒にってもらい、生徒のみで買い物ができるかをチェックしてもらい、その結果を学校に報告してもらい、学校と家庭との情報交換を密に行う。

4. 実行

- ・夏休み明けてからの授業で数学の単元を設定し、年内いっぱいまで反復しながら力の定着を図り、家庭での実践を冬休みに行ってもらい。

チーム議論Ⅱ

5. 実行状況のチェック

技術・家庭科とのチーム議論にて、授業設定を身近な内容にしたことで、生徒たちがどのような反

応をしながら授業に取り組んでいるかを情報交換したうえで、うまくいったことやうまくいかなかったことなども報告しあい、お互い改善にむけてのアドバイスをしあった。

6. 方法の改善と目標の再確認

1) 方法の改善

・おつりの概念を理解させていくのがなかなか難しいので、文章問題を使って、おつりについて理解してもらうように努める。

2) 目標の再確認

目標：授業で学んだことを家庭で実践する。

7. 指導の検証

1 2月14日に郵便局に行き、年賀ハガキを3枚購入した。手元には、350円もっており、本人たちが自ら、「年賀ハガキ3枚ください。」と購入した。

1) 生徒の動き。

・A君は、しっかりと「年賀ハガキ3枚ください。」と局員さんに話しかけ、購入できた。150円を支払うところ、ちょうど金額を持ち合わせていたが、200円支払い、50円のおつりももらっていた。

・Bさんも、「年賀ハガキ3枚ください。」と局員さんに話しかけて、購入した。Bさんは、150円ちょうどを支払い、おつりはもらわない払い方をした。

2) 家庭での実践。

・A君は、5000円をもってデパートに行った。まず、パン屋さんにて、好きなパンを選びレジに並んで支払いをした。300円の商品を5000円で支払ったが、4700円のおつりももらわずに、パンだけを持って去ろうとした。次に、靴屋に行き、現在履いている靴と同じものを選び、同サイズの在庫「26.5cmください。」と聞くことができた。3830円の商品だったので、4000円支払えばよいところ、700円を支払った。親の助言により、4000円支払い、170円のおつりを受け取った。

・Bさんは、1450円をもってデパートに行った。780円の靴下を購入し、1000円支払い220円のおつりを受け取った。次に、208円の英語のノートを購入。210円支払い、2円のおつりを受け取った。最後に、210円のポケットティッシュを購入し、210円ちょうどを支払った。全ての買い物を一人でできた。

8. 成果と課題

1) 成果

授業では、野菜やお菓子、飲み物を買えるような単元を設定した。そこでは、売り手と買い手に分けることで、「全部でいくら」や「おつりの概念」など両方の意識をつけさせることができたと考えている。その結果、ハガキを買うといった、授業とは違ったものを購入することにおいても、しっかり購入ができたのではないかと考えられる。また、Bさんにおいては、すべての行動を一人で一通りできるようにもなり、次の新たなステップの課題を考えていきたいと思う。反面A君の場合は、学校で行った郵便局での買い物では、しっかり購入することができたが、冬休みの宿題においては、おつりももらうことができなかったとの報告があった。しかし、物を買うときには、お金が必要でお金を支払ってようやく物が買うことができるといった、基本的な面は定着したようだ。

2) 課題

家庭での実践通り、A君においては、おつりの概念が欠落してしまったようです。やはり、繰り返しプレ授業を行っていたのだが、時間が経ってしまうと学習した内容が欠落してしまい、定着には至らなかった。来年度以降も引き続き、お金の単元を取り組んでいき生活力の定着を図っていきたい。Bさんにおいては、新しく、「今ある金額で何が購入できるか」などの課題をあげて一つずつステップアップしていきたい。